

2021年1月17日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「それでも切り株が残る」イザヤ書6章12～13節

主任牧師 加藤 誠

「なお、そこに十分の一が残るが、それも焼き尽くされる。切り倒されたテレビンの木、榎の木のように。しかし、それでも切り株が残る。その切り株とは聖なる種子である」(イザヤ書6章13節)。

忘れられない悲しみの日、忘れずに語り継いでいくべき日…という日があります。例えば8月15日、8月6日、8月9日がそうでしょう。今年ちょうど10年を迎える3月11日も、忘れてはならない、風化させてならない日の一つだと思います。

わたしにとっては今日、1月17日がそうです。26年前、神戸に住んでいて阪神淡路大震災を経験した一人として、この日は朝5時には起きて身支度を整え、5時46分、神戸の人たちを思いながら黙祷をささげ、祈りの時を持ちます。神戸を離れて18年になりますが、この日だけは特別です。この日の前と後とで目の前の光景が一変する経験は衝撃でした。暖房のない寒い礼拝堂で、バリバリとヘリコプターが飛び交い、街中に響く緊急車両のサイレンを聞きながら、革ジャンとジーパンで講壇に立った礼拝の光景は、今でも深く心に刻まれています。教会と幼稚園が避難所になり、近所の方たちと約二ヶ月間、避難生活を共にしたこと、全国からのボランティアを受け入れてさまざまな支援活動に携わった経験が、わたしの聖書の読み方、教会の捉え方を大きく変えました。もしあの1月17日を経験していなかったら、今のわたしはいません。まったく違った人生になっていたでしょう。そういう意味で1月17日は、人生の大きな分かれ道となった特別な日なのです。

どう受け止めて良いのか分からない、昨日までの「当たり前」がまったく通じない、昨日まで「確かに」握りしめていたはずのものが砂のように手の指の隙間から零れ落ちていく衝撃と混乱の日々を支え導いてくれたのは、聖書の御言葉でした。

「こういう時だからこそ聖書に聴き、礼拝をささげたい」という教会の人々の存在でした。祈りを届け続けてくれた全国の教会の交わりでした。「神さま、あなたはどこにいるのですか？」と叫ばざるを得ない現実の中でも、私たちには聖書が与えられている。インマヌエルの主、イエス・キリストが共に歩みたもう。私たちは一人ではない。私たちが新しい一週間をまず主の日の礼拝から始めるのは隣り人と一緒に生きるため。神さまのお手伝いをして、この街の隣り人と一緒に生きるためなのだということ。大切な「基本」を教えてくれたのが26年前の1月17日でした。

わたしの歩みを方向づけ、支え、励ましてくれた御言葉がいくつかありました。一つは使徒言行録3章6節です。「**ペトロは言った。『わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい』**」。この御言葉は、1月17日の朝5時46分の震度七強の地震に襲われる直前に、ほんとうに不思議な形でわたしに与えられたものです。わたしはこの御言葉をノートに書き記して短く祈った直後に、震度七強の大きな揺れで床に四つん這いにさせられました。

その時から教会が避難所になるという怒涛の日々が始まったのですが、「金や銀ではない。イエス・キリストの名によって私たちは立ちあがり、歩く力を与えられるのだ」という御言葉が、ことあるごとにわたしを力づけ続けてくれたのです。

二つ目は、コヘレトの言葉3章1節以下です。「何事にも時があり、天の下のことにはすべて定められた時がある」(1節)、「神はすべてを時宜にかなうように造り、また永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない」(11節)。この御言葉は、震災直後の日曜日、1月22日の『聖書教育』の箇所でした。震度七強の震災によって街が破壊され、多くの人びとの命が奪われた悲しみの中では「どうしてですか？」という問いしか出てきません。「すべてに時がある」と達観して語ることはできませんでした。そのときに「神さまの時を私たち人間は見極めることはできない。『この震災はこういう意味だ!』と勝手に意味づけることはできない」ということは、わたしにとっては慰めになりました。「今は分からないままでいい。この震災の大きな悲しみに隠された意味は、神さまが最後に教えてくださる。分からないことは神さまにお任せしてイエスさまのあとをついていけばよい…」という思いにさせられたのでした。

そして三つ目が、今朝ご一緒に開いたイザヤ書6章13節です。「**なお、そこに十分の一が残るが、それも焼き尽くされる。…しかし、それでも切り株が残る。その切り株とは聖なる種子である**」。すべてが焼き尽くされる中、それでも切り株が残り、そこから“聖なる種子”、新しい世界を創り出す“種(信仰)”が生え出てくる。これは神さまの希望の言葉です。神戸の中でも長田は大規模な火災が起り、まるで空襲の焼け跡のようになった地区でした。礼拝堂が焼け落ち、司祭館だけが残った鷹取カトリック教会が地域の支援拠点になっていて、よくそこに足を運びました。礼拝堂をはやく再建しようという声がありましたが、地域が焼け野原の間は礼拝堂は再建しない。地域の再建があつてはじめて教会が成り立つ…という方針のもと、「ペーパードーム」という段ボール素材の大きな柱にテントを張った仮設の礼拝堂が建てられたのです。ベトナムの人たちが礼拝出席者の半分の教会でしたが、長田地区の人びとの復興をささえるさまざまな支援団体が教会の敷地にプレハブを建てて活動拠点にしていました。つまり教会員の人たちがすべてを担うのではなく、教会「外」の人たちが教会の敷地を使って地域の復興のための活動を展開していったのです。そこに教会と地域の新しい“かたち”が生まれていました。

「しかし、それでも切り株が残る」。

イザヤはここでバビロン捕囚という悲劇的経験から生まれた“新しい信仰”を語っています。これまでの「当たり前」を失うことは大きな痛みですけれども、神さまは“聖なる種子”“新しい信仰”をそこから生え出させていかれるのです。今、コロナ禍に大きく揺さぶられている私たちですけれども、この悲しみの苦闘が、あとで振り返った時に“新しい信仰”をいただいた時になったね…と言えるように、この時、神さまの御言葉にしっかりと心と体を向けていきたいのです。